

母親の愛着表象と子どもに対する態度の関連について

荒井紫織

問題と目的：

幼少期からの養育者（主に母親）の関わり方、親子関係がその後の子どもの認知、情緒、社会性の発達にとって重要な役割を果たす事を示す研究が多くある。関わり行動、親子関係について Bowlby (1973) は「人が親になった時、その人は自分自身が子どものころに経験した親子間の相互作用パターンと同じパターンを子どもに向ける傾向があり、それゆえ、このような関係性のパターンは世代から世代へと伝達されて行く」と述べている。それは、人生早期の特定の養育者（主に母親）との愛着関係が次第に内在化され、“内的表象”となり、それがその人のその後の対人関係における認知や行動を導き出すためであるとされている。

このような Bowlby の見解に基づいて、母親の子ども時代の愛着経験が自分の子どもとの関係にどのような影響をおよぼすのかについていくつかの研究がなされており (Grossmann et al., 1988 ; Fonagy et al., 1993 ; Steele et al., 1996), AAI (アダルト・アタッチメント・インタビュー) で評定された親自身の愛着の内的表象と SSP (ストレンジ・シチュエーション・パターン) で評定された子どもの愛着パターン間に有意な関係が見出されている。また AAI で安定・自律型に分類された母親は適切な情動調律を行い (Haft & Slade, 1989), 応答的で適切な関わりをする母親の子どもは SS の安定型に分類される傾向があるなど、AAI の分類や SSP パターンと親の子どもへの関わり行動との関連も見出されている。

しかし、AAI, SSP はともに、それが成人であれ子ども (child) であれ、「子ども (offspring)」の「親 (parent)」に対する表象を評定しているものであり、親の子ども (offspring) および子どもとの関係に対する主観的経験についての検討がされていなかった。内的表象が関係性についての主観的経験の形成に重要な役割を果たすとすれば、親が子どもに対して持つ表象、親の主観的経験に注目する必要があるだろう。この点については Zeanah ら (1994) が親が特定の子ども、子どもとの関係について持つモデルを評定するために WMCI (Working Model of Child Interview) を開発し、SSP との比較検討を行っている程度である。

そこで本研究では、まず研究1において、AAI で評定される「親が幼少期の愛着経験から形成してきた愛着に

まつわる内的表象」と、親の「子どもに対する態度」の関連について質問紙を用いて量的に調査する。ここで態度とは Krech (1962) の定義に従い、認知、感情、行動の3要素からなるものと考え、「子どもに対する態度」とは「子どもに対する感情」、「子どもにまつわる事象に対する認知」、「子どもに対する行動」とする。さらに研究2においては AAI で評定される母親の愛着表象と、WMCI で評定される母親が子どもに対して持つ表象との関連について2つのケースを、研究1の結果を踏まえて細かく検討、考察していく。

研究1

方法

対象：

1998年9月から1999年6月までにN大学医学部附属病院産婦人科を受診した妊娠中期の妊婦に調査協力を依頼し、同意が得られた73人。

測度：

妊娠中期—AAI (Main et al., 1984)

妊娠後期—母親—胎児愛着尺度 (Cranley, 1981 ; 以下 MFAS)

産後—①対児感情尺度 (花沢, 1992), ②母性行動・感情尺度 (柴田ら, 1986, 遠藤, 1990を参考に作成), ③Maternal Attitudes Questionnaire (Warner, 1997 ; 以下 MAQ), ④妊娠中の子どもの印象 (自由記述), ⑤産後の子どもの印象 (自由記述)

結果

AAI の分類が安定型のもので不安定型のもので子どもに対する態度の各指標の平均点を t 検定で比較した。その結果、安定型に分類されたものは不安定型に分類されたものに比べて、妊娠中に高い母親—胎児愛着得点を示し、産後には母性行動得点が高く、育児に伴う否定的感情、汚物処理に伴う感情が低かった。

研究2

目的

より詳細に検討。子どもに対する知覚を評定するための半構造化面接である Working Model of the Child Interview (Benoit et al., 1994 ; 以下 WMCI)

母親の愛着表象と子どもに対する態度の関連について

方法

対象：

研究1に参加した女性のうち、産後の面接調査に応じた女性2人。第一子の女兒を出産したDさんと第二子の男児を出産したCさん。

測度：

妊娠中期—AAI

産後半年—WMCI

結果

Case-1 (Dさん)：

AAIで安定型に分類されたDさんはWMCIの中で子どもについて、「ニコリするところ」、「音楽が好き」、「お風呂も好き」などの特徴を具体的なエピソードを挙げて語り、子どもとの関係について「私の手元に生まれてきた時からもうかけがえのない存在で、なくてはならない存在です」と強い関与と愛情を示した。また、子どもを意志を持つ1人の個人として認め、その感情を敏感に感じ取りつつ関わりを持っていることがうかがわれ、Dさんの子どもに対する表象は望ましいBalancedに分類された。さらに、インタビュー中も子どもに対して敏感でバラエティーに富んだ関わりをし、子どももその関わりによってすぐになだめられた。

Case-2 (Cさん)：

AAIで不安定型に分類されたCさんは、WMCIの中で子どもについて「…おおらか…おとなしい子だけどだんだんとやっぱりねえ…何だろう…誰にでも愛想はいい」と漠然としたことを語り、子どもとの関係について「泣いててもいいやと思ってほかっとく」、「(子どもにとって自分は)いないと困るわねえ、食事の面で」など、子どもへの関与が低く、否定的とも言える発言が聞かれ、

Cさんの子どもに対する表象は子どもとの心理的距離が特徴的なDisengagedに分類された。また、インタビュー中は子どもに働きかけることも少なく、タイミングの悪い関わりで子どもがぐずることが多く見られた。

結果と考察

研究1では、母親が自身の親との間で形成してきた愛着についての愛着表象と、今回妊娠・出産した子どもに対する態度(認知・感情・行動)の関連について検討した。その結果、愛着表象が安定型の母親は愛着表象が不安定型の母親よりも、妊娠中から胎児に対して働きかけを多く持ち、産後は母性行動を多く取る傾向が示された。また、愛着表象が不安定型の母親は育児に携わる中で否定的な感情を持ちやすく、特に子どもの汚物(吐いたミルクや汚れたおむつ)を扱う際に否定的な感情が強くなることが示された。

また、研究2では母親の愛着表象とその母親が子どもに対して持つ表象との関連について検討した。その結果、愛着表象が安定している母親は子どもに対してバランスの取れた表象(Balanced)を形成し、子どもにも積極的で調和の取れた関わりを持ち、一方、愛着表象が不安定な母親は子どもに対して心理的距離のある表象(Disengaged)を形成し、調和の取れない関わりを取ることが示された。

研究1, 2を通じて、母親が自身の親との経験の中で形成してきた愛着表象と子どもに対する態度および表象、関わり行動に関連が見られ、自身の親との関係が次世代に対して繰り返される可能性が示唆された。これらの結果は、小人数のデータから導き出されたものであり、今後調査対象者を増やした更なる検討が必要である。